

これからのOR学会に向けて

OR学会前会長：ファナック株式会社 副社長 齊藤 裕



2018年4月からの2年間の任期中、特に最後に新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のパンデミックの影響で、急遽、2020年度春季大会を中止し、節目の通常総会もWeb会議での開催をせざるを得ない状況になりましたが、こうした想定外の事象が起こった中でも、何とか本学会の運営を全うできたのは、理事会、事務局はもとより各種学会の活動を支えてくれた皆様のお蔭です。本当にありがとうございました。

さて、任期を終えた現在、改めてこの2年間の振り返って、学会運営の将来に向けて思うところを皆様へのメッセージとして送りたいと思います。参考にしてください。

現在、あらゆるモノが繋がるIoT（Internet of Things）とクラウドを用いて、さまざまなデータを活用し、モデル化、最適化を実現していくCPS（Cyber Physical System）のような新たなデジタル化が進行しています。こうした時代には、実学としての本学会の役割はますます大きくなっていることを折に触れ、皆様には申し上げてきました。実際に、今回の新型コロナウイルス感染症での厚生労働省のクラスター対策班の北海道大学の西浦教授らが感染症の数理モデルによるシミュレーションを用いて提言されるなど、ORが各種問題解決に有効なことは周知の事実です。しかし、一方で、こうした環境の中でも、私の任期中も学会の会員の増加には至らずに、減少の傾向が継続しているのが事実です。何故でしょう？ 私には、この現象がデジタル社会に向かう中、産業界で起きていること、すなわち過去に繁栄した企業がビジネス環境の変化に適応しようと必死で変革に取り組んでいる状況と良く似ている、つまり、既存企業が生き残るために、必死に取り組んでいるデジタル変革と同様に、OR学会の運営も変革する時期にきているのではないかと感じています。

皆様もご存じのとおり、現在、産業界では、既存企業を脅かす存在として、これまでとは全く異なるモデルでビジネスを急拡大しているプラットフォーマーと称される新興ITベンダー企業が登場しています。その多くが、生産者・消費者（提供者・利用者）といっ

たプラットフォームのユーザ中心の視点で、デジタル技術とデータを駆使して、ユーザにメリットのあるエコシステムを作り上げ、しっかりと検討されたアーキテクチャーにアルゴリズムを組み込んで、インセンティブなどによるユーザ間のリレーション強化、活性化を実現しています。そして、このエコシステムは、産業界の新たなインフラとして、ユーザ数の増加＝ビジネスの拡大を実現しています。

これをアナログ的思考で捉えた私の仮説では、学会の会員数を増やすには、ユーザ（＝会員）中心の視点で、学会を会員参加型の「会員が生きるエコシステム化」することが求められているのではないかとことです。私に解決策がある訳ではありません。ただ、もう一つコメントしたいのは、前述のプラットフォーマーは、プラットフォーム上の資源としてのデータを活用し、デジタル技術を駆使して、エコシステムを活性化し、ビジネスの資産であるユーザ数増加（＝ビジネス拡大）を実現していることです。これは、まさに、OR的アプローチです。現在のデータドリブン型システムでのマネジメントが求められている時代、OR学会だからこそ、デジタル化を加速し、資産である会員の増加に向け、資源となる各種データを活用し、得意とする問題解決のための科学的思考方法を用いて新たな仕組みと仕替への構築に取り組んでいけば、実現できるのではないのでしょうか。是非、他の学会のリファレンスモデルになるべく、本学会として、会員増加、学会活動の活性化に向けて、こうした変革に取り組んでいかれることを期待しています。

最後になりますが、ORは自然科学に限らず、人文科学、社会科学も繋ぐことができる横断的かつ学際的な学問分野としての特徴をもっています。今後、発展するデジタル社会において、OR学会、そして、学会員は、各企業、わが国、そして、世界での諸課題の解決に、さまざまな形で貢献していくことが期待されています。今後の皆様の益々のご活躍と学会の飛躍的發展を祈念し、私の最後の言葉にしたいと思います。2年間にわたるご支援とご協力、本当にありがとうございました。